

コロナ禍における地域の学びを支える専門職の研修の挑戦と課題

— 福井大学・富山大学における社会教育主事講習をふり返って



矢内 琴江 (福井大学大学院連合教職開発研究科)

0. はじめに

2020年7月24日に福井大学・富山大学社会教育主事講習が開講された。今年度、初めて福井大学と富山大学が共同で実施し、受講生が自分の地域にいながらにして受講できる講習の実現をめざした。そして、この講習を通して、日ごろ、地域の学習を公民館主事、行政職、学校教員など様々な立場から支えている受講生が、自らの実践を協働的に省察しながら、地域における長期にわたる多様な領域の協働的な学習の道行を支えるための、ファシリテーション・コーディネーション・マネジメントを実践的に学ぶことを企図した。

本講習は、今年度が初めての開催であったことに加えて、コロナ禍での実施であったことから、対面形式とオンライン形式のハイブリット型での講習となった。さらに、従来の座学による講義形式ではなく、小グループでの話し合いと、実践と学習の記録化を軸にして、受講生自身が、自らの実践をふり返りながら協働的に学びを深めるスタイルをとった。この協働的探究学習の方法をハイブリットでどのように実現するかが大きな課題だった。

本稿では、本講習の運営実務の担当者として関わった筆者の視点から、今年度実施した主事講習をふり返り、その方法論的意義と課題について述べたい。なお、来年度はまた状況が大きく変化することが予想されるが、今回の主事講習を省察することは、これからの時代の社会教育職員の研修のあり方について考えていくことに貢献するのではないかと考える。

本論に先立ち、以下では、今回の実施の背景にある、「社会教育主事講習等規定の一部を改正する省令」について簡単に説明したい。

1. 実施の背景

中央教育審議会(中教審)では、今日の地域社会が抱える複雑な課題を解決するために、社会教育がもつ以下のような特徴に期待している。すなわち、個人の成長とともに、「他者と学び合い認め合うことで相互のつながりを形成していく」社会教育の学びの特徴である¹⁾。そこで、この特徴を生かして、社会教育の役割がより十全に発揮されるために、2019年4月1日より「社会教育主事講習等規定の一部を改正する省令」が施行された。それにより、社会教育主事には、今後、「NPO等の多様な主体と連携・協働し、社会教育事業の企画・実施による地域住民の学習活動の支援を通じて、人づくりや地域づくりにおいて中核的な役割を担うことが期待」されることとなった²⁾。それに加えて、この役割が、従来の社会教育現場だけではなく、多様な実践領域・多様な業種で発揮されることを期待して³⁾、社会教育主事講習修了者には、「社会教育士」の称号が付与されることとなった。

社会教育主事(士)の役割が見直されることで、今後、社会教育主事(士)となる者には、ファシリテーション能力・コーディネーション能力・マネジメント能力の獲得が不可欠とされるようになった⁴⁾。そこで、社会教育主事講習・養成課程のカリキュラムも見直された。ここでは、社会教育主事講習についてのみ言及するが、その見直しの主なポイントは2点ある。1点目は、新科目として「生涯学習支援論」と「社会教育経営論」が設置された点である。しかも、その内容は、単に理論や技術を習得するものではなく、実際の現場で活用できるような学習のデザインが求められている。2点目は、単位数が9単位から8

単位になったことである。現場で働いている受講生の負担軽減については、2016年に出された社会教育主事養成等の改善・充実に関する検討会「社会教育主事

旧カリキュラム	
科目	単位
生涯学習概論	2
社会教育計画論	2
社会教育特講	3
社会教育演習	2
合計	9



新カリキュラム	
科目	単位
生涯学習概論	2
生涯学習支援論	2
社会教育経営論	2
社会教育演習	2
合計	8

養成の見直しに関する基本的な考え方について」でも指摘され、ICTの活用の必要性も提起されてきた⁵⁾。

以上のようなカリキュラムの内容の見直しも踏まえて、福井大学・富山大学社会教育主事講習をデザインし、コーディネートした。以下では、その全体の概要を説明する。

2. 概要

まず、実施日程である。この日程を組む際に、コロナ対応の休校措置のために夏休みが短縮された学校教育関係者の受講生がいることを想定して、学校が休みとなる連休に主事講習を実施することとした。

第1サイクル：生涯学習概論	7月24日(金)・25日(土)・26日(日) 8時50分～18時
第2サイクル：生涯学習支援論	8月2日(日)・3日(月)・4日(火) 8時50分～18時
第3サイクル：社会教育経営論	8月9日(日)・10日(月)・11日(火) 8時50分～18時
第4サイクル：社会教育演習	9月20日(日)・21日(月)・22日(火) 8時50分～18時

次に、会場についてである。富山大学会場、福井大学会場、Zoomの3会場を設けた。福井大学の場合は、大きな講義室を使用して、受講生がなるべく分散できるように、しかし、グループ間の空間が空きすぎて違和感が生じないように、テーブルの配置を工夫した。

本主事講習の実施体制についてである。福井大学が主事講習の受け入れ大学となり、主事講習全体の企画準備と運営、受講生との連絡調整等は福井大学教職大学院のスタッフ(柳澤昌一教授、三田村彰教授、半原芳子准教授、矢内)、事務手続き等は教務課の職員が主に担った。福井大学の教員スタッフは、主には福井大学履修証明プログラムで福井県内の公民館主事の研修を担当しているメンバーである。富山大学からは社会教育を担当されている藤田公仁子先生にご協力いただいて、今回の共同開催を実現することができた。また、講習期間中の富山大学会場の準備運営には、福井大学のスタッフとして前田健志先生(コーディネーターリサーチャー)の協力を得た。

さらに、ファシリテーターや、後述する公開クロスセッションの聴き手として、様々な方たちの協力を得た。福井大学連合教職大学院の他のスタッフだけではなく、他大学で社会教育を担当している大学教員、福井県外の公民館職員や行政職員の方たちの協力を得た。また、福井市のベテランの主事・元主事の方たちの協力も得ることができた。そのため、多様な地域、立場、経験の方々が、この主事講習の学びを支えて下さった。

続いて、受講生についてである。受講生は、主に福井県内の公民館主事・行政職員、富山県内の生涯学習課職員・学校教員・大学職員、石川県内の行政職員、愛媛県内の学校教員で、地域や立場も様々であった。受講形態としては、今回社会教育主事の資格を初めて取得するという4科目の受講生が29名いた。次に、すでに金沢大学での社会教育主事講習を受講し社会教育主事任用資格は取得済みで、今回社会教育士の資格取得に必要な2科目(「社会教育支援論」「社会教育経営論」)のみを受講する方が25名いた。以上、生涯学習概論と社会教育演習は29名、生涯学習支援論と社会教育経営論は54名の受講生がいた。

	4科目受講生	2科目受講生
富山大学会場	5名	0名
福井大学会場	6名	4名
Zoom	13名	19名
Zoomと会場参加の併用	5名	2名
計	29名	25名
合計	54名	

最後に、開催方法について触れておく。すでに述べた通り、本講習は、対面形式とオンライン形式の両方を用いたハイブリット型での開催となった。この開催のために、まずオンラインでの受講者には、講習開始前にZoomの練習会を実施した。講習の進行に関して、全体に関わるようなガイダンスや、事例報告などの場合には、あるいは全体で交流する場合には、富山大学会場、福井大学会場、そしてオンラインの受講生をZoomでつなげた。小グループでの話し合いの際には、会場とオンラインを分けてグループを組んだ。オンラインでの小グループによる話し合いには、Zoomのブレイクアウトセッションを活用した。

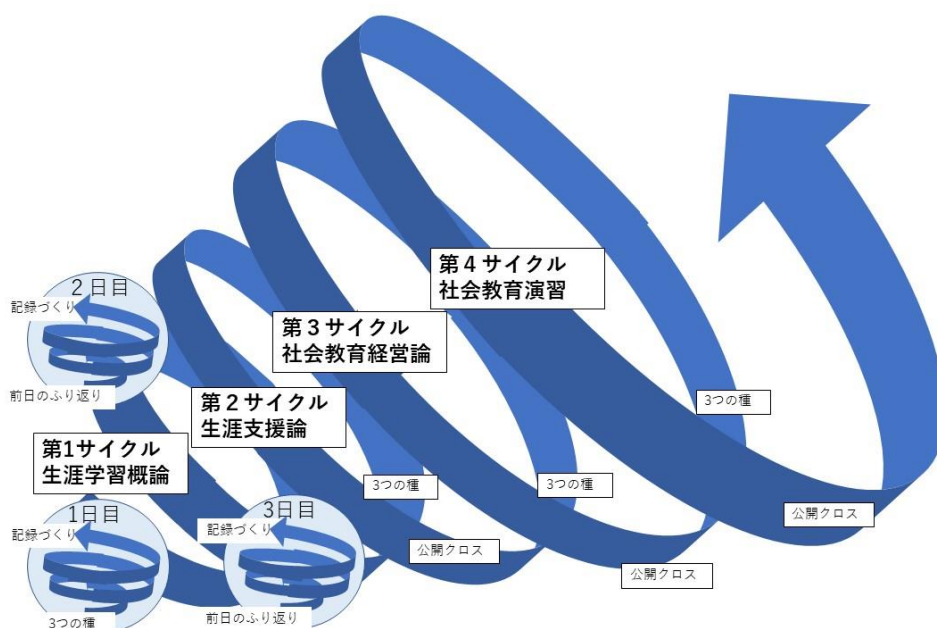
3. 本講習の編成とアプローチ

以下では、本社会教育主事講習をどのように編成し、どのようなアプローチをとって実施してきたのかについて述べる。今回このようなデザインとアプローチが可能になった背景には、福井大学における、福井県内の公民館主事を対象とした、地域の学びを支える専門職の力量形成の場としての「福井大学履修証明プログラム」での経験⁶⁾と、福井市の公民館主事有志の学習会の積み重ね⁷⁾からの学びがある。本講習は、これらの実践を土台にしながら、さらにそれを発展させた形で実現された。

まず、講習全体のデザインに関わる考え方である。本主事講習の受講生たちは、公民館、コミュニティ・センター、行政、学校、地域のコミュニティで、人々の学びを支える専門職として実践を積み重ねている。しかし、日々変化している流動的な現場の状況や、長期にわたって現場に関わり続けている状態の中では、自らの実践の中での学び、実践の課題、課題を解決していくための糸口が、見えづらくなってしまふ。地域の学びをコーディネートする専門職の社会教育主事(士)自身が、地域や活動の課題を捉え、その解決に向けた実践の展開を支えるための見通しをもつためには、「実践と省察のサイクル」に基づく学びのデザインが必要である⁸⁾。

そこで、本講習では、実践の協働的な省察を中軸に据えて、講習全体を通して、受講生自身の実践の省察が深まっていく協働探究の学習サイクルをデザインしている(イメージ図)。各サイクルの1日1日が、探究の出発点の確認(「3つの種」⁹⁾や前日のふり返り)から始まり、資料を読んだり、グループでの話し合いを経て、1日の終わりには、その日の自

身の学びをふり返る記録を書くという流れになっている。これは、サイクルというレベルでも同様の構造になる。初日の最初の時間は、「3つの種」で出発する。生涯学習概論以外の科目の「3つの種」は、前のサイクルの学びのふり返りになっている。その後、2日目の後半まで各サイクルでのメインの取り組みを経た後、このサイクル全体をふり返る記録を作成し、3日目の午後は公開クロスセッションで、記録を報告し合う。この主事講習の全体のレベルにおいても同様の構造である。第1サイクル生涯学習概論では、自身の学習の出発点である「3つの種」の確認の後、社会教育・生涯学習の本質について探究し、第2サイクル生涯学習支援論では、学習の展開を支えるファシリテーション、そしてコミュニティ間の学び合いを支えるコーディネーションについて学び合い、第3サイクル社会教育経営論では事業や組織のマネジメントのあり方を探究し、最後の第4サイクルではこれまでのサイクルでの探究をふり返り、自身の省察をさらに深めるまとめの記録を作成し、最終日の公開クロスセッションで報告する。このように、各日、各サイクルもまた、それぞれにスパイラル状の学習を形成しており、このいくつもの小さな学びのサイクルが、相互に関連し合っ、主事講習全体が、一つの大きなスパイラル状の発展的学習となっているイメージである。



【図】 福井大学・富山大学社会教育主事講習の学習デザインのイメージ

このような協働探究の学習を成り立たせるために、全てのサイクルに共通するアプローチがとられている。すなわち、①小グループによる話し合い ②実践記録や社会教育関係資料の分析 ③学習プロセス・実践プロセスの記録化 ④クロスセッションによる記録の報告の4つである。

①小グループの話し合いについてである。グループの話し合いが、この講習での協働的な省察を支える重要な方法である。グループのメンバーが語る言葉を聴きながら、自身の実践や、資料の読みを照らし合わせると、自身の実践や地域に関する捉え、実践の意味や価値、課題、また自身の立ち位置や思いなどが鮮明化してくる。グループは、基本的には、4～5 人の受講生とスタッフによって構成される。小グループには、2 つの形態がある。一つは、3 日間のうちの初日から 3 日目午前までの「ホームグループ」。このグループでは、2 日半にわたって、実践の省察や資料の検討などを通して、協働での学びをすすめる。もう一つが、3 日目午後のクロスセッションを構成する「クロスグループ」である。ホームグループとは違ったメンバーで、さらに探究を進める。グループのファシリテーターは、スタッフや協力者の方たちが務めたが、生涯学習支援論と社会教育経営論では、ファシリテーションを実践的に学ぶために、受講生が順番で担当を決めてファシリテーターを務めることを提案した。そして、スタッフや協力者の方たちが、各グループに“聴き手”として、話し合いを深めていくための問いやコメントをするために入った。1 人だけにファシリテーションを任せるのではない協働的ファシリテーションという形である。

②実践記録や社会教育関係資料の分析についてである。この講習では、受講生自身が、地域の活動の持続可能性を支える力を形成するために、長期にわたる実践の記録を読むこと、さらに自らの実践を社会的かつ歴史的な文脈の中で捉え返すために、社会教育関係資料、文部科学省からの資料等を読むことを大事にした。そのために、資料は、講師の側で重要なポイントだけを精選し引用して配布するのではなく、全体を読むことを提案した。講習の時間の中で個人で読んだ後、グループで、文献を通して自身が改めて大事だと思ったことや、つかんだことなどについて共有し合う。文献の中に、「正解」を探すのではなく、文献に自らの実践を照射させて読み、そしてグループの仲間とともに検討することで、自身の働き、実践や地域の課題、実践の意味や価値を明らかにしたり、課題を克服する糸口を探るのである。

③学習プロセス・実践プロセスの記録化についてである。記録づくりは、学びをつなぐ役割を果たしている。毎日の学び、各サイクル間の学び、そして、講習での学びと実践をつなぐ役割である。この講習では、各科目の 3 日間を通じて、毎日、自身の学びのプロセスを跡付ける記録を書く。毎日、1 日の終わりには、その日の学習がどのように展開し（話し合いや、読んだ資料のあらまし）、その展開を通して、自身はどのような気づきを得たのかを記す。この記録を書くことは、宿題にはせず講習の中で時間をとった。そして、翌日の 1 日の始まりのホームグループでの話し合いは、前日の記録の内容を共有する振り返りから出発する。こうした 2 日間の記録をもとに、3 日目のクロスセッションで報告し提出する記録を作成する。2 日目の後半から、3 日目午前にかけて、途中でホームグループで書いたことの共有や書くのが困難な点を相談する時間を設けながら、集中してまとめの記録を書く時間をとる。

④クロスセッションによる記録の報告についてである。上述したように、クロスセッションは、各科目の3日目午後実施される。そこでは、各科目のまとめの記録に関する報告を聞いた後は、その内容について質問や感想を伝え合う。このクロスセッションは、単純にまとめの報告としての意味だけではなく、先述した学習プロセス・実践プロセスの記録化と合わせて次の4つの意味をもつ¹⁰⁾。第1は、社会教育主事、また社会教育士の「専門職としての責務、公的な仕事の価値と内実を公的に示す責任」としての意味である。第2は、「評価という、避けては通れない課題に備える」という意味である。社会教育法の改正により、公民館は運営の評価をもとに、改善を図る努力が求められている(社会教育法第32条)。しかし、形式的・画一的な評価方法に依拠しては、社会教育の多様で、かつダイナミックな活動に基づく学習の価値を真に評価することはできない。したがって、実践の価値を吟味し、その発展へと導く評価の在り方が求められている。実践や学習の記録は、それらの内実を最も具体的にかつ説得力をもって示す資料となりうる。第3は、記録化の営み自体がもつ学習的な意味である。「社会教育を支える専門職が実践を共有し省察する」という記録化は、「専門職として学び合うコミュニティの形成」を支える学習となる。第4は、今日の教育課題に応える学習としての意味である。すなわち、記録と報告を通して培われる「自身の実践と思考・探究を公的に表明する力/書く力」は、人々が生涯にわたって学び続けることが求められる知識基盤社会における「生きる力」をはぐくむために不可欠な力である¹¹⁾。

以上、本講習のデザインを見てきた。続いては、各科目の内容と実際の様子を具体的に述べていく。

4. 各科目の内容と全体の展開

最初のサイクル「生涯学習概論」のテーマは、「生涯学習・社会教育の理念・歴史・実践を学ぶためのアプローチ」である。生涯学習概論では、まず社会教育の今日の方向性を文部科学省の答申などの提案文書から読み取り(第1日目)、次に社会教育・生涯学習の理念・歴史と社会教育の展開を支える、地域における学習の展開を記した実践記録を読み取った(第2日目)。2日目に取り上げた資料は、寺中作雄『公民館の建設』(寺中作雄『社会教育法解説・公民館の建設』、国土社、1995年所収、初出は1946年)、宮原誠一「社会教育の本質」(『社会教育論』、国土社、1990年所収、初出は1950年)などである。この生涯学習概論で、2日間資料を検討することを通して、まだ主事歴の浅い方たちも多かったり、コミュニティ・センターの職員として働いている方、学校教育の現場での経験が長い方たちがいたが、受講生からは、社会教育の意味や公民館の役割を改めてつかむことができたという声を聞くことができた。また、担当している事業の社会教育的な価値や意味を捉え返す発言も多く聞かれた。参加者の背景は多様であるが、今日の社会状況や歴史的経緯の中で社会教育や生涯学習の意味を捉え返すことで、学び合うコミュニティとしての最初の共通

の土台を得ることができたと考える。

第 2 サイクルは、新科目の生涯学習支援論で、社会教育士資格取得のための 2 科目受講生たちが加わり、参加者数は倍となった。また、この 2 科目受講生は、比較的主事歴が長く、また福井大学履修証明プログラムの受講経験者も多かった。さらに、外部のファシリテーターも、ベテランの主事や元主事の方たちの協力を得ることができた。この新たなメンバーを迎えた、生涯学習支援論のテーマは、「学び合う自治のまちづくりの主体としての学習をどう展開し支えるか」だった。初日の「3つの種」では、2 科目受講生には、これまでの実践を振り返った内容を、そして 4 科目受講生には、第 1 サイクルをふり返った内容で準備をしてもらった。互いの出発点を確認し合った後に、このサイクルでは、地域における長期の実践記録や理論書を読み、その展開を丁寧にたどりながら、地域の協働学習を支えるファシリテーション・コーディネーションのあり方、コーディネーターの働き、さらにはコーディネーターの実践的な力量形成プロセスの展望について協働探究した。提案した記録は、松下拓『健康問題学習と住民の組織活動』（勁草書房、1981 年）、国立市公民館保育室運営会議『子どもをあずける』（未来社、1979 年）、竹澤宏保「探求するコミュニティへの誘い スズメノカタビラの生態を探究する（理科・1 年）」（福井大学地域教育科学部研究会『学び合う学校文化』、エクシート、2020 年、2-17 頁）である。社会教育の記録ではない、「スズメノカタビラ」を提案したのには、学校教育を現場としてきた受講生たちもいたため、その経験を軸に協働探究の支え方を探っていくことができるようにと考えたためであった。また、コミュニティの形成と展開を探る理論的手掛かりとして、エティエンヌ・ウェンガー他『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』（翔泳社、2002 年）も提案した。なお、生涯学習支援論と次の社会教育経営論では、受講生自身が、グループのファシリテーターを順番で担当した。それによって、ある受講生からは、ファシリテーションとはどういうことなのかについて、文献からよりも、先輩たちのファシリテーションの中で、自分自身が意見を受け止めてもらったり、じっくり聞いてもらうことを経験して、実感として理解することができたという言葉が聞けることができた。

第 3 サイクルの「社会教育経営論」では、地域における協働探究のさらなる発展を支えていくために、「変動する社会の中での組織改革マネジメント：現状をふまえて展開の可能性を探る」というテーマを設定した。ここでは、企画書の作成と、各自治体の施策の比較研究の 2 本柱で、地域の協働学習を支える組織・制度をいかに組織し、維持・発展させていくか？そのために必要な予算をどのように確保するか？公的組織として求められる評価・監査にどのように備えるか？どのような評価が求められるのか？といった問いに取り組んだ。具体的には、文部科学省から実際に公募事業として募集されていた、地域の中で社会的に孤立している人々の「学びを通じた社会参画の推進に関する実証研究事業」の企画書の作成である。まずホームグループで公募資料を検討し、受講生自身の地域の状況と課題

をふり返り、すでにある事業や地域の活動に目を向けて、組織運営体制や、予算などの観点から、現状の中にどのような発展の可能性があるのかを探ることを提案した。さらに、評価に関しては、これまでの評価の形式を問いつつ、社会教育の活動を支える評価への備え方を探ることを提案した。また、比較事例研究として、各自治体（富山県、石川県、福井県、岡山市、福井市、文科省）の担当者に、その社会教育施策について報告していただいた。それによって、自身の企画書を今日の政策動向の中で捉え返すことを意図した。3 日目午後の公開クロスセッションでは、各自がこの企画の内容を報告し合った。受講生から実際に提案された企画としては、地域の防災活動、公民館主事のネットワークづくりなどが挙げられる。この社会教育経営論の終了後に、受講生からは実際に関わっている事業に働きかけをしてみたり、企画を実現させるために動き出したという声を聴くことができた。

第 1 サイクルから第 3 サイクルまで、それぞれのアプローチから、地域における学び合うコミュニティのファシリテーション・コーディネーション・マネジメントのあり方を探って来た。しかし、3 日間という短い期間もあり、十分に深めきれなかった点があったり、この 3 サイクルを通してより深めて考えていくべき課題が明らかになってきたということも考えられる。そこで、第 4 サイクル「社会教育演習」では、提案された 4 つのアプローチの中から 1 つ（複数の場合もある）を受講生各自が選び、グループでの話し合いも重ねながら、4 サイクルをまとめる記録づくりに取り組んだ。最終日である 3 日目は、これまでと同様に公開クロスセッションとした。このクロスセッションは、4 サイクルを通じた学習の成果を報告する場でもあるので、様々な地域や大学の方たちや、2 科目受講生の方たちに、幅広く声をかけて参加の協力を得た。

5. 4 サイクルをふり返って

最後に、この 4 サイクルをふり返って見えてきた、今回の社会教育主事講習の中で意義深かった点と、今後の課題に関して 6 点述べたい。

1 点目は、今回、コロナ禍での対応として取り入れたが、オンライン開催にしたことの意味は大きかったと考える。一つには、受講生から、「長い期間地域や自宅を離れられないがオンラインであれば参加しやすいと思った」「オンライン講習を経験したことがなかったのでチャレンジしてみたいと思った」といった声が聞かれたことである。社会教育主事養成等の改善・充実に関する検討会でも、受講生の負担がより少ない開催方法を検討すること、特にオンラインの活用の必要性も指摘されている。多様な状況の人々の学びを保障するためにもオンライン形式の導入は、コロナ対応以外としても重要であったと考える。また、多様な地域から受講生やファシリテーターが参加できた点も重要であった。それにより、それぞれの地域を比較検討しながら、自身の地域や実践の課題や展望を捉え返すことが可能になった。

2点目は、4科目受講生と2科目受講生がともに学ぶことができたことが非常に重要だったと考える。今回、4科目受講生は、社会教育に関わってまだ日の浅い受講生が比較的多かった。その一方で、2科目受講生は、主事歴が長い方たち、また福井大学履修証明プログラムの受講経験者も多かった。そのため、グループでの話し合いの際に、2科目受講生が、話し合いの展開を支えて下さった。その一方で、まだ主事歴の浅い方の話を聞きながら、主事歴の長い方が、自分自身の最初のころの経験を振り返る契機になったという声もあった。このように、経験年数が異なる人たちが一緒に学ぶことで、それぞれの視点から、互いの経験を意味づけ合うことができたのではないかと考える。

3点目は、様々な立場の方や、ベテランの公民館主事の方たちにファシリテーターや聴き手としての協力を得られたことの重要性である。受講生の語りを多角的に、また長期的な時間展望の中で聴きとり意味づける機会となった。今後も、このような学びの持続可能性と発展を保障していくためには、主事講習の際にだけ事前の依頼をするという形ではなく、むしろ主事講習の学びを支えるメンバーとして、長期的に協働的な学習コミュニティを組織化していく必要があるだろう。

4点目は、2科目受講が資格取得としてだけではなく、長期にわたる実践を省察する学びの場となった点である。2科目受講は、社会教育主事有資格者が「生涯学習支援論」と「社会教育経営論」を受講して社会教育士の称号を保障する措置である。しかし、受講生の記録や発言からは、今回の主事講習が、単に資格取得としての意味だけではなく、長きにわたる実践を振り返る場としての意味を持ち得ていたことがわかった。特に、2科目受講生は、主事歴が長い方たちが多いので、このような振り返りの機会となったことの意味は非常に大きいと考える。しかし、この2科目の期間では、経験豊富な受講生たちが自らの実践をより深く省察し記録化していくには短すぎるのではないか。そこで、こうした受講生の長期的展望に立った力量形成の場を保障するには、この2科目受講修了後に、より長期的に、仕事の展開にそった学びの場を組織化することが重要だと考える。

5点目は、今後の課題として、内容、運営、その体制において、ジェンダー平等、セクシュアリティの多様性、多文化共生、インクルーシヴなどの視点や具体的な工夫が不十分であったことを挙げる。講習の中で語られた地域の状況には、多様性をめぐって切実で厳しい状況があった。また、受講生の多くが、仕事と家庭の両立が求められている状況の中で働き学んでいるという実態に対して、受講生の負担を軽減する受講形式を検討するだけではなく、上述の視点を、運営者側が問題意識としてもち、その視点から講習の内容だけでは不十分だろう。むしろ、ファシリテーションやコーディネーションの中で、その課題を問い克服していけるようアプローチしていくことが求められると考える。それは、延いては、地域におけるジェンダー平等や多様性の尊重を実現していくことにつながるからである。

6点目は、オンライン形式の課題である。この主事講習では、Zoomのブレイクアウトセッションを用いて、小グループの話し合いを実現することはできたが、その閉鎖性は否めなかった。各グループの状況の把握や、オンライン上のハラスメント防止対策のためにも、受講生に違和感を覚えさせない形でのモニタリングの仕組みを検討する必要がある。それと合わせて、各グループのファシリテーターとの丁寧なふり返りの時間を設定することも不可欠である。その一方で、繰り返し述べたように、オンラインにすることによって、地域や大学を超えた連携が可能になった。特に、社会教育を専門とする教員が各大学で少ない中で、大学を超えて連携し協働することが可能になるのは非常に重要である。この可能性を発展させて、社会教育主事講習の学びをより質の高いものへと改善していくためには、社会教育職員の養成・研修に関わる研究者のネットワークでの共同研究がより重要になってくるだろう。

おわりに

以上、本稿では、福井大学・富山大学社会教育主事講習をふり返り、その可能性と課題を検討してきた。様々な課題はあるものの、オンライン形式の導入と、実践の協働的省察を軸にすることによって、より多くの社会教育関係職員の方たちの学び合うコミュニティを形成する場となったと言えるだろう。今後も、この主事講習が、福井県、富山県、石川県などの社会教育関係職員の方たちの学びにとって、また社会教育そのものの発展にとって、重要な場となっていくためにも、運営チーム自身が、受講生たちの記録から学び、この経験を丁寧にふり返ることを通して、より良い学習の場をコーディネートしていきたい。

注

- 1) 中央教育審議会「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について(答申)」、2018年12月21日、3頁。
- 2) 社会教育主事養成等の改善・充実に関する検討会「社会教育主事養成の見直しに関する基本的な考え方について」、2016年8月31日、2頁。
- 3) 文部科学省「資料 1-2 「社会教育士」について」、https://www.mext.go.jp/content/1398830_03.pdf、(最終アクセス日:2020年10月27日)
- 4) 同上。
- 5) 同上、4頁。
- 6) 以下の論文を参照されたい。杉山晋平・羽田野慶子「公民館実践の質的評価を支える実践コミュニティ—福井大学における社会教育専門職のための研修プログラム「学び合うコミュニティを培う—」、日本社会教育学会編『日本の社会教育第56集社会教育における評価』、東洋館出版、2012年、225-237頁。柳沢昌一「実践と省察のサイクルを通して実践力を培う」、日本社会教育学会編『地域を支える人々の学習支援:社会教育関連職員の役割と力量形成』、東洋

- 館出版、2015年、162-173頁。柳沢昌一「コミュニティ学習支援者の実践力形成を支える—福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」、福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」実行委員会『福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」第3年次報告書』、2014年、85-88頁。
- 7) 中島貴美江「「つむぎの会」での学び合うコミュニティの実践」、つむぎの会・福井市公民館連絡協議会・福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」実行委員会『福井の公民館Ⅲ—学びあう自治のまちづくりのために—』、2015年、149-159頁。
- 8) 日本社会教育学会 社会教育・生涯学習関連職員問題特別委員会「知識基盤社会における社会教育の役割—職員問題特別委員会 議論のまとめ—」、日本社会教育学会編『学びあうコミュニティを培う—社会教育が提案する新しい専門職増』、東洋館出版社、2009年、16頁。
- 9) 「3つの種」とは、福井大学連合教職大学院や履修証明プログラムで、実践的自我介绍と呼んでいるもので、探究の出発点となる自身の実践を3つのポイントでふり返るものである。本講習では、受講生に、例えば生涯学習支援論の前には、①これまで自身が取り組んできた活動・実践について ②現在取り組んでいることの中で特に重要視していること ③この講習において学んでいきたいこと、について文章を書いて用意することをお願いした。
- 10) 福井大学・富山大学社会教育主事講習「福井大学・富山大学社会教育主事講習 学び合うコミュニティを培うファシリテーション・コーディネート 実践的な展望をひらくために 2020 Summer Cycles」(要綱)、8頁。
- 11) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」、2008年1月17日、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf (最終アクセス日:2020年10月9日)

矢内 琴江 (やうち ことえ)

2016年、早稲田大学大学院文学研究科満期退学。2018年、博士(文学)取得。

現在:福井大学大学院連合教職開発研究科・特命助教(2019年から)

専門:社会教育学、ジェンダー論、ケベック研究

主な研究:「貧困地区の住民を支えるアニマトゥール・ソシアルの実践と力量形成—実践者の意識化を支える学びの構造」(『社会教育職員養成と研修の新たな展望』、東洋館出版社、2018年)、博士論文「ケベックにおけるフェミニズムの社会教育学研究—実践コミュニティの意識化と知の生成—」(早稲田大学、2018年)。